
『言葉と物』における 古典主義時代の四辺形の成立

重見晋也

はじめに

ミシェル・フーコーの『言葉と物』(1966)¹⁾は、古典主義時代を対象とした歴史書を標榜していた『狂気の歴史』(1964)²⁾とは異なり、フーコー自身が自らの考察の独自性をはっきりと意識しているという意味において重要な作品といえる。このことは、フーコーが『言葉と物』のなかで考古学を「みずからの可能性の条件の歴史といえる、一つの歴史を明確化する」³⁾学問であると定義づけた上で、著書の副題として「人文諸科学の考古学」と付していることから明らかであろう。フーコーによれば、『言葉と物』の「考古学的調査」は、「ひとつは、古典主義時代の端緒となるもの(17世紀中ごろ)、もうひとつは、19世紀初頭のわれわれの近代性の発端をしるすもの」という「西欧の文化の《エピステーメー》のなかに、二つの大きな不連続」を見分けることを可能にしたのである⁴⁾。こうしてルネサンス期と古典主義時代を分ける不連続と古典主義時代と近代 *modernité* を分かつ認識論的切断の存在をフーコーは一挙に断言するのである。

ところで、この不連続という概念の外延がいかなるものであれ、二つの不連続によって明確に切り取られた時代をフーコーは古典主義時代と呼んでいることに間違いはない。そして『言葉と物』におけるフーコーの関心は、古典主義時代へとはっきりと向けられている。そのことは、『言葉と物』に挿入された二点の図版のすべてが、古典主義時代に関わるものであることにも示されているだろう。二点の図版のうち一点は言わずと知れたベラスケスの『侍女たち』(1656)であり、これについてフーコーは第一章のすべてを費やして考察している。残る一点は、第一部の最後、第二部の前に置かれた17・18世紀と19世紀における経験的領域を図解したとおぼしき二つの四辺形の図である。この四辺形の図は、一見すると『侍女たち』に描かれた人物たちと同じほどには重要視されていないようにもみえる。というのも、ベラスケスの描いた絵画を対象にして

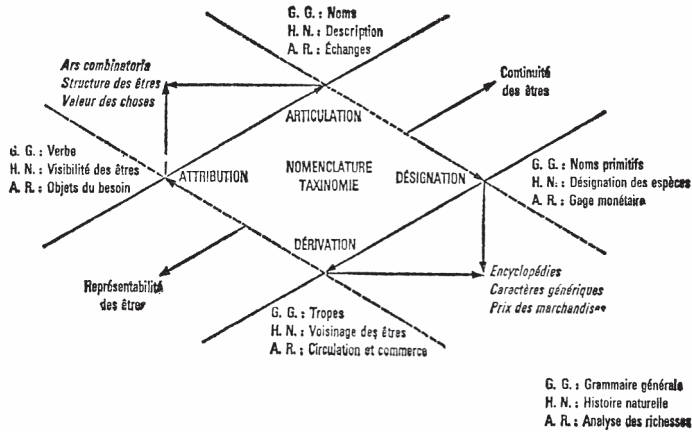
XVII^e XVIII^e siècles.

図 1

おこなわれた詳細な分析と比較すると、フーコーが四辺形について明確に言及しているのは第四章第七節におかれた「言語活動の四辺形」⁵⁾と題された短い節だけだからである。

しかし実際には、17・18世紀と見出しがつけられた四辺形モデル(図1)には、古典主義時代の学問領域として個別の考察対象となっている「語ること」としての一般文法、「分類すること」としての博物学、「交換すること」としての富の分析という三つの領域への言及を認めることができる。このことは、『言葉と物』の全体とはいわないにせよ少なくとも古典主義時代を対象としたフーコーの考察にとつては、この四辺形モデルが根本的な概念であることを想定させるものである。本稿はフーコーが提示した二つの四辺形のうち古典主義時代の四辺形に焦点を絞り次の三点について考察しようとするものである。すなわち、四辺形がルネサンス期との関わりにおいてどのように導き出されるか、古典主義時代の経験的領域の全体的な構想のなかでどのように位置づけられるか、そして最後に四辺形が古典主義時代の知の構築において果たす役割はどのようなものなのかという三点である。

本稿における議論のおわりに、われわれは四辺形がルネサンス期の遺産を引き継ぐものであって、古典主義時代における知の構築を語るフーコーにとって、いわば参照系としての役割を果たしていることを確認できるはずである。

I. ルネサンス期における四つの類似の円環

四つの要素によって人間の経験的領域を説明しようとするフーコーの試みは、古典主義時代や近代についての考察においてのみ有効というわけではない。事実、『言葉と物』の第二章第一節は「四種の相似」⁶⁾と題されており、われわれはそこにルネサンス期における知の布置が四つの要素によって説明されるのを確認することができる。ところで、ルネサンス期における類似を「四種の相似」に整理し説明しているのがフーコー自身であることを忘れてはならない。第二章第一節は、古典主義時代よりも前の時代における西欧の知的文化が類似によって構築されていたという断定から始められる⁷⁾。そのうえでフーコーは、「16世紀における類似の意味論的系列はきわめて豊富である」⁸⁾ことを認めその可能性を列挙した上で、「さしあたっては、その相互の接続によって類似にもとづく知を規制していた、主要な形象を指摘すればこと足りよう。疑いなく本質的なものが四つある」⁹⁾と述べるのである。このようにしてフーコーは多くの可能性のなかから、ルネサンス期の知の基本原則としてわずかに四つの相似を自らの論のなかに導き入れるのである。すなわち、「《適合》 *convenientia*」「《競合》 *aemulatio*」「《類比》 *analogie*」「《共感》 *sympathie*」である。これら四つはすべて二つの物のあいだに相似関係を構築する際に発揮される作用を表しているとしており、われわれとしては各々の相似についてそれが表すところのものを確認することから始めなければなるまい。

「《適合》 *convenientia*」とは、相似というよりもむしろ空間的な隣接関係、「たがいに接近し接触している」¹⁰⁾状態を表す。この空間的な特性に加えて相似としても考えられるという曖昧さによって、このことばは二重性を獲得する。すなわち、《適合》によってあらわされる状態は、二つの物が隣接関係を根拠として特性の相似を導き出すと同時に、まったく反対の動き、すなわち類似していることを根拠に隣接関係を打ち立てることも可能にする。それは「『次から次へ』の形で空間に結びついた類似」¹¹⁾なのである。このようにしてひとつの物が他の多くの物と結びつき、多様な価値を持つことが可能になるのである。

第二の形式である「《競合》 *aemulatio*」は、《適合》とは異なり空間的な隣接関係を求めて移動しはしないものの距離を越えて作用する類似である¹²⁾。それは遠く世界に分散した物同士がお互いに模倣しあうことを可能とする。フーコーはパラケルススが『リベル・パラミールム』で用いた双生児の比喩を引用することで「世界のこの基本的二重性」¹³⁾を説明している。《競合》の模倣は、互いが互いを模倣しあいながら無限に続けられる運動である。それは《適合》のように鎖を形成するのではなく、「たがいに他を反映して競いあういくつかの同心円をなす」¹⁴⁾のである。互いが互いを目指して模倣しあえるような双方向性、あるいは可逆性こそ、《競合》の本質をなしているのだ。

《適合》と《競合》とは第三の形式である「《類比》 *analogie*」のなかで重なり合う。

つまり《類比》は、《適合》の「多価性 polyvalence」と《競合》の「可逆性 réversibilité」¹⁵⁾との両方に特徴づけられている。ある物は他の物と次から次へと隣接関係により相似関係を形成するが、一度形成された相似関係は、関係を形成する二項のそれぞれが互いに模倣しあうことによって、より堅固な相似関係へと展開する。《適合》と《競合》とが「物それ自体の可視的で全体的な相似」¹⁶⁾を通じて形成されるのに対して、《類比》はより部分的な相似を認めることを可能にする。こうして、星と空とに認められた相似は、草と大地、生物と地球、鉱物と岩石、感覚器官と顔、皮膚のしみと身体などのあいだにも競いあって認められることとなる¹⁷⁾。

しかし、《類比》が《適合》と《競合》との単なる複合体ではないものとして特徴づけられる最も重要な理由、それは《類比》が人間という特権的な一点を有していることにほかならない。人間という点を通過すれば「関係は変質することなしに転倒する」¹⁸⁾のである。したがってクロロウスは『外徴論』で、「肉は土塊、骨は岩、血管は大河である。膀胱は海であり、人体の七つの主要部分、鉱山の底に隠されている七つの金属にほかならない」¹⁹⁾と考えるのであり、ブロンは人間と鳥の骨格を比較して次のように詳述するのである：

[...] : on y voit « l'aileron nommé appendix qui est en proportion en l'aile, au lieu du pouce en la main ; l'extrémité de l'aileron qui est comme les doigts en nous... ; l'os donné pour jambes aux oiseaux correspondant à notre talon ; tout ainsi qu'avons quatre orteils es pieds, ainsi les oiseaux ont quatre doigts desquels celui de derrière est donné en proportion comme le gros orteil en nous ». ²⁰⁾

このようにさまざまな物が人間という中心を經由して別の物へと向かい、《類比》という相似関係を取り結んでいくことになる。《適合》が鎖状をなし、《競合》が同心円をなしたとすれば、《類比》は「放射状の空間」²¹⁾を形成する相似なのである。

類似の第四の形式は「《共感》 *sympathie*」である。《共感》は、あらかじめ決定された連鎖に従うものではなく自由に作用する類似である。したがって《適合》と同じく類似関係を打ち立てるし、《競合》と同じく距離を無化して双方向の模倣関係により同心円を形成するし、「世界のさまざまな物の運動を誘発し、もっとも離れたものをも近づける」ような「可動性の原理」²²⁾でもある。と同時に、「目に見える外的な動きで物をたがいに惹きよせることにより、共感ひそかに内的な動き——質の転位とそれら相互の交替——を誘発する」²³⁾のであり、たとえば、熱く軽い火は空気中で「軽やかな蒸気」²⁴⁾となって消滅すると考えられたのである。この強力な変質作用によって、《共感》は物同士を互いに《同化》させ《同一者》 *le Même* として、「それらの個別性を消滅させる危険な力を持つ」²⁵⁾のである。しかし、物の個別性が《共感》によってすべて《同一者》に還元されてしまうわけではない。物同士が通じ合いながらもその個別性を保つことができるのは、《共感》につねに抗う《反感》が作用するからである。カルダーノが『物

の狡智について』（仏訳版、パリ、1656年）のなかで描いてみせた鱈と天竺ねずみ、天竺ねずみと蜘蛛の関係は、《共感》と《反感》の均衡運動を言いあらわしているのである。すなわち、鱈にとって天竺ねずみは天敵であるが、天竺ねずみにも天敵となる蜘蛛がいるとされるのである。この均衡運動によって、空間と時間の存在が、結合と分散が可能となるのであり、《適合》と《競合》と《類比》の三つの類似が作用を始めるのである。それは単に世界を《同一者》で満たすことを目指しはしないのであり、《共感》と《反感》の「はたらきによって、世界は同一のままにとどまり、類似したものは、現にあるがままのものでありながら、しかもたがいに類似したものでありつづける」²⁶⁾ことができるのだ。

四つの類似は、《適合》が《競合》に包摂され、《類比》が両者を包摂し、《共感》はこれら三つの作用をすべて兼ね備えているが、しかしながら《共感》は三つの類似を次々に作用させるための出発点としての役割も担っているのであり、そのかぎりにおいてこれら四つの類似は《適合》から《競合》と《類比》を経由して《共感》へとたどり着くとふたたびそこから《適合》を目指して歩みを始めるような、そうした四項を経由する円環を形成しているのである。

かくして四つの類似は、ルネサンス期における知のエピステーメーとして、《適合》から《共感》へと巡ることを止めない循環性の中で無限とも思える類似関係を構築していくことを可能にする原動力となっている。しかしそうであっても、それぞれが自律的に類似関係を構築する力も兼ね備えているのであり、その意味において四つの類似は、16世紀において一般的に類似関係を構築する際の、四つの異なる系列あるいはアプローチとも考えることができるだろう。すなわち、16世紀の知が類似関係というエピステーメーによって構築される際には、《適合》、《競合》、《類比》、《共感》という四つの作り方があったということである。16世紀のエピステーメーは、類似関係を構築することを基本的な規則としつつ四つの異なる類似関係の構築方法を通じて、知を構築していたのである。

II. 古典主義時代の記号の体系と類似の体系

ルネサンス期において円環として描かれていた知の布置は、古典主義時代に入ると四辺形 *quadrilatère* と呼ばれるようになる。円環から四辺形へのこのことばの移行にフーコーの概念的な不連続性を認めることもできるかもしれない。しかし、円環が四辺形へと置き換わったからといって、円環の循環するイメージが失われたわけではない。本稿の冒頭に採録した四辺形の図からも明らかなように、「17・18世紀」と説明が付された四辺形の各辺には、ちょうど右回りの循環を説明するように小さな矢印が付されているのである。形態が異なってはいっても、それがあらかず循環的な特性は保たれて

いるのである。そうであれば、円環から四辺形への移行が示しているのは、ルネサンス期においては四つの類似で示されたような平面の特性が、循環性によってよりも四つの辺で構成されるという特性、「四」という数への価値付与が優先されたことをあらわしているのかもしれない。まただからこそ、四辺形をあらわすことばとして、「四」をあらわす「quadi-」という接頭辞を付した「quadrilatère」ということばを用いたと推論することも可能になってくるのである。

ルネサンス期のエピステーメーから断絶した古典主義時代のエピステーメーの特徴を記述するため、フーコーは『言葉と物』の第一部の残り、つまり第三章から第六章までを費やしている。第四章から第六章までが、一般文法、博物学、富の分析といった経験的領域を個別に取り上げているのにたいして、「表象すること Représenter」と題された第三章は、より一般的な視点から、古典主義時代のエピステーメーがどのように特徴づけられるかを記述する役割を担っている。すなわち、第三章第一節「ドン・キホーテ」の隠喩的でいわばルネサンス的な類似による古典主義時代の記述の後、第二節「順序 L'ordre」²⁷⁾から第三章の最後におかれた第六節「『マテシス』と『タクシノミア』」までの記述によって、フーコーは四辺形の輪郭を浮き立たせようとするのである。それは、順序づけの基礎のうえに築かれた「17世紀文化における一般的現象」²⁸⁾と《マテシス》の関係（第二節「順序」）であり、記号の「三つの可変要素」²⁹⁾と二元化した体系（第三節「記号の表象作用」）であり、表象の二重化と記号の体系についての考察（第四節「二重化された表象」）であり、古典主義時代における想像力の役割と《発生論》についての考察（第五節「類似の想像力」）であり、最後に《マテシス》と《タクシノミア》と《発生論》とが規定する古典主義時代の知の一般的布置についての考察（第六節「『マテシス』と『タクシノミア』」）という四つの節である。古典主義時代における知が、順序立てることによって知を構築したとフーコーが指摘するのであれば、われわれとしてもフーコーの立論を順に追っていくことが重要であろう。そこで第三章第二節から出発して、フーコーが古典主義時代のエピステーメーをどのように記述し、その記述を通じて何を導き出そうとするのかを確認することにしよう。

第三章第二節の冒頭は、ルネサンス期と17世紀初頭とのあいだに横たわるとフーコーが見定めた不連続を「経験的次元において受けいれる」³⁰⁾ことを宣言している。エピステーメー間に不連続がもたらされた原因の究明は、こうして著作全体の考察の対象から外され、不連続を事実として受け入れたところから考察が始められる。そしてその後から、フーコーはデカルトの『精神指導の規則』³¹⁾に依拠しつつ「17世紀文化における一般的現象」の記述を開始する。

よく知られているように『規則』はデカルトの生前には未発表だった遺稿であり³²⁾、一般的な命題を規則として第一規則から第二十一まで書き連ねたテキストである。執筆時期については1628年に古いノートを書き起こしたのではないかと推測されている³³⁾。

当初の予定では一部が12の規則を含み全体で三部から成る予定であったようだが、現存するのは第一規則から第二十一規則までであり、第十九規則から第二十一規則までは命題部分のみが残されている。ここで命題と呼ぶのは章のような構成としてまとめられている各規則の冒頭におかれたテキストのことであり、周知の通り、『規則』の各規則はこの命題テキストを出発点として規則についての考察を詳述するという構成になっている。

『規則』の草稿は、いわゆる『ストックホルム遺稿目録』において«F»として示されていたテキストであり、「綴じあわされた9冊のノート、真理探究における精神指導のための有用かつ明白な規則論の部分を含む」³⁴⁾と説明が付されていた。この遺稿はデカルトを看取ったスウェーデン大使シャニュの手により、兄弟であり『省察』の仏訳者でもあったクレルスリエへと送られた。しかし、パリの直前で遺稿を載せた船が転覆してしまったため、遺稿は3日間水につかったあげく引き上げられ、並べて乾かすのに数室を要し、順不同になったが、幸いにも修復不能なほど傷んだものはなかった³⁵⁾、と伝えられている。クレルスリエのもとに届けられた遺稿は、その後『ポール＝ロワイヤル論理学』および『ポール＝ロワイヤル文法』の著者であるアルノーとニコル³⁶⁾、ニコラ・ポワソン、マルブランシュ、パイエへとわたっていくことになるが、結局その遺稿は失われてしまっている。そういうわけで、1684年に刊行されたフラマン語版も1701年にアムステルダムで出版された初めてのフランス語版³⁷⁾も遺稿に直接もとづいて出版されたのではなく、遺稿の写し(AT, X, 359-469)にもとづいて出版されたものである。またそれとは別の写しの存在も確認されており、そちらはライブニッツがオランダで購入したハノーバー写本であるが、前述の写本と比較して転写の質が劣っていることが確認されている³⁸⁾。

デカルト『哲学著作集』(1963)でフランス語訳を担当したジャック・ブランシュヴィックは、『規則』を『幾何学』(1637)や『方法序説』(1637)へと結実するデカルト的形而上学の道程に位置づけようとする進化論的理解を批判し³⁹⁾、『規則』が想像力と理解との関係の問題にしていると主張している⁴⁰⁾。古代からデカルトにいたるまでの「普遍数学」概念を考察したダヴィド・ラブアンは、デカルトにおける「普遍数学」が関係と比率という数学の中心概念と結びつけて考えられていると指摘している⁴¹⁾。ブランシュヴィックとラブアンの理解の力点に隔たりがあることは確かであるが、デカルトは『規則』において、後の思索と通底する考察を展開していることになるのであり、それが「未完で、寄せ集めで、未刊行で、作者が一度も言及していない論考」⁴²⁾であったとしても、『規則』はデカルトの著作の中でも重要な位置を占めていると考えることができるのである。

それでは、フーコーは『言葉と物』においてこのデカルト的省察に依拠することによって、何を明らかにしようとするのだろうか。具体的にフーコーの引用箇所を確認して

いくことにしよう。フーコーが『言葉と物』において主に取り上げている規則は、第一、第三、第六、第七そして第十四の五つの規則である。もっとも多く引用されているのは第十四規則の四度で、続いて、第六規則と第七規則がそれぞれ二度引用され、第一規則と第三規則は一度だけ引用されている。以下、フーコーによって引用された規則の『言葉と物』におけるコンテキストを順を追って検証することで、フーコーがデカルトの規則に何を読み取っているのかを確認しよう。

最初に引用されるのは第一規則である⁴³⁾。『規則』の冒頭が引用されるのは、ルネサンス期の知の基本的経験であった類似とは異なる17世紀の批判的態度を証言するためである。古典主義時代の批判的態度の一例としてフランシス・ベーコンの四つの「イドラ」にもフーコーは言及しているが、フーコーにとってベーコンの「イドラ」よりも『規則』におけるデカルトの考察の方が17世紀とルネサンス期との不連続を描くのにふさわしかったのであろう。

続いてフーコーは第十四規則を引用している。デカルトへのこの参照によってフーコーは、比較という知的操作の重要性を強調する。すなわち、認識における直観と演繹とを区別した上で、演繹が示すのは「二つあるいはそれ以上の物の相互の比較」⁴⁴⁾であるから「人間理性のはたらき」⁴⁵⁾において比較は本質的役割を演じている、と述べた一節を引用している。このように比較の重要性を強調した上で、フーコーはそこから認識の本質的操作としての比較には「計量的比較と順序の比較」⁴⁶⁾の二つがあり、計量的比較とは「ついにただ順序のみの考察に支配されるような秩序にしたがって、配列」⁴⁷⁾されるものであること、いいかえれば「順序の比較」の方が計量的比較よりも一般性をもつと述べるのである。こうしてデカルトの第十四規則を用いて、フーコーは人間の認識における「順序の比較」の方法的優位性を主張しているのである。

複数回引用された規則としてはもう一つ第六規則がある。フーコーは『言葉と物』において二度にわたって第六規則に言及しているが、最初に第六規則が引用されるのは、順序による比較が最初の項から始まって他の項へと移行していく単一の行為であることを根拠づけるためであり、この比較の「まったく中断されない」⁴⁸⁾運動としての性質が第七規則とあわせて注記されている⁴⁹⁾。同規則の二度目の引用では、古典主義時代のエピステーメーを構成する要素に同一性と相違性の分析があることの論拠として、「ひとつの物が、ある点から見れば絶対的であっても、他の点から見ると相対的なこと」⁵⁰⁾があるのと同じように、順序の認識は「必然的かつ自然的（思考との関係で）であると同時に、恣意的（物との関係で）なものでありうる」⁵¹⁾ことがしめされる。こうしてフーコーは第六規則に依拠することで、人間的な英知を普遍的英知へと導くことを可能にする比較を連続的な運動としてとらえた上で、そのような連続的な運動の認識が、自然的でも恣意的でもあり得るような二面性をもつことを導き出すのである。

第六規則とあわせて言及された第七規則の引用は、比較を運動とみなすことの論拠と

されていたが、第七規則はそれとは別にもう一度引用されている。引用とともにフーコーは、古典主義時代に網羅的調査や対象の分節化や分析を通して可能になった結果、「完全な列挙」⁵²⁾という概念が登場することに言及している。

そして最後にフーコーは、古典主義時代における物語 *histoire* と学問 *science* という二つの領域の分離を指摘し、それによって17世紀に始まる古典主義時代のエピステーメーがルネサンス期の知に対してもたらした五つの変化を、プラトンやアリストテレスの知らず物語として学問から切り離して考える第三規則からの一節を引用することによって締めくくっている⁵³⁾。

デカルトにおいて第三規則は、それに先立つ第二規則において提示された「確実かつ明証的な認識」⁵⁴⁾に関わる命題から導出されたものである。第二規則で展開された考察にしたがえば、「数論と幾何学とがほかの学問よりはるかに確実な」⁵⁵⁾学問であり、それ以外の学問は、「二つの方法、すなわち、経験 (*experientia*) あるいは演繹 (*deductio*) によって、事物の認識に到達する」⁵⁶⁾とされる。つまり一方に数学があり、他方にそれ以外の学問が存在していることになる。そして数学以外の学問においては、事物の認識において誤りを犯す方法としての経験か、あるいは「あるもののほかのものからの純粹な推論 (*illatio*)」⁵⁷⁾としての演繹か、どちらかの方法を用いて事物の認識に至るとされるのである。ここでデカルトが経験というのは、対象に対する直接的な接触によって確認の確実性が獲得されるということではない。それは第十二規則⁵⁸⁾において述べられているように、なにもものかの知覚において意識に与えられるのが、外的現実としての客体と客体に対する視点や感覚器官からの感覚としての主体という二つの要素の結果だということである。こうしてデカルトは、主体と客体の両方が関わり誤謬の場となりうる経験にたいして、「純粹な推論」としての演繹を重視するにいたるのだ⁵⁹⁾。

第三規則においてデカルトが考察しているのは、第二規則で区別された二つの学問領域の片側の方法論に関する指摘、すなわち数学以外の学問における経験と演繹という二つの方法についてである。方法としての経験は、第三規則においてすぐに「物語 (*historiae*)」⁶⁰⁾といいかえられる：「もしわれわれがプラトンやアリストテレスのすべての議論を読みはしたが提起された問題に確固とした判断を下すことができないのであるならば、[...] われわれは学問ではなくして物語 (*historiae*) を学んだのだとみなされるであろう」⁶⁰⁾。このようにして、デカルトは数学以外の学問を物語と学問とに分ける。そのうえでデカルトは、物語に対立する領域としての学問に、直観と演繹⁶¹⁾という二つの認識様態を一挙に認めているのである。デカルトにとって直観 *intueri* とは、ラテン語の語源が示すようにただ単に目で「見る」ことをさすが、それは知性に対立し意味を奪われたものとして万人が有するものとしての直観である。そのようなものとしての直観は、「懐疑の余地をまったく残さぬほど容易で判明な把握作用 (*conceptus*)」⁶²⁾であり、「はるかに単純であるがゆえにいつそう確実であるところの疑うことのできぬ把握作用」⁶³⁾

であるとされる。デカルトは明証性と确实性の源として直観を位置づける。その一方で演繹は、「确实に認識されたある別の事柄から必然的に結論されるすべてのもの」⁶⁴⁾を意味するが、それは演繹によって「ひとつひとつのものを明白に直観していく連続的にかつ決して中断されることのない思考 (cogitatio) の運動によって、真であってしかも既知であるところの原理から演繹される、というだけで、ひじょうに多くの事物が、それら自身は明証的でなくても、确实に認識されるからである」⁶⁵⁾。

こうして第三規則はデカルトによる学問の大まかな分類を明らかにしている。すなわち、学問は数学とそれ以外の学問に区別されたのち、数学以外の学問が物語と学問に下位区分されるのである。そのうえで物語と対置される学問に可能な認識様態として直観と演繹が分けられるのである。フーコーがデカルトに認めた物語と学問の区分が、より上位の分類区分として数学と数学以外の学問という異なる二つの領域をもつのであり、こうした学問の二面性、事物の二面性についての理解をフーコーはデカルトに依拠しつつしめしているのである。

以上見てきたように、フーコーがデカルトからの引用によって強調するのは、ルネサンス的な類似による知との断絶であり、順序による比較の優位性であって、その比較は「完全な列举」という理想を目指す中断されない連続的運動として性格づけられる。そこからフーコーは、認識が比較による順序づけによって「明白な同一性と相違性とにしたがって分析」⁶⁶⁾をおこなうとしても、その順序づけは必然的とも恣意的ともとらえることができるような曖昧な二面性によって特徴づけられると指摘しているのである。そして、この認識が帯びうる二つの性質は、古典主義時代の知の領域全体へと拡大され、古代ギリシア以来古典主義時代まで続いてきた物語という領域の反対側に古典主義時代の分析的な知によって構築される学問というもうひとつの領域を形成するにいたるのである。この物語と学問という二面性こそが古典主義時代の知のエピステーメを基礎づけているとフーコーが考えているものであり、さまざまにことばを変えつつも古典主義時代の考察を通じて『言葉と物』のなかで繰り返される根本的概念となっているのである。

第三章第二節におけるフーコーの主眼は、デカルトに依拠しつつ学問の二面性とその不可分性を、古典主義時代のエピステーメとして位置づけることにあった。だからこそ節の終わりで、フーコーは二つの体系のあいだに古典主義時代の知の誕生を宣言しているのである。

[...]; sur un bord, on trouvera les signes devenus instruments de l'analyse, marques de l'identité et de la différence, principes de la mise en ordre, clefs pour une taxinomie ; et sur l'autre, la ressemblance empirique et murmurante des choses, cette similitude sourde qui au-dessous de la pensée fournit la matière infinie des partages et des distributions. D'un côté, la théorie générale des signes, des divisions et des classements ; de l'autre le problème

des ressemblances immédiates, du mouvement spontané de l'imagination, des répétitions de la nature. Entre les deux, les savoirs nouveaux qui trouvent leur espace en cette distance ouverte.⁶⁷⁾

同一性と相違性とを区別することを可能にする標識として記号を用いる一般的理論と、自然発生的な想像力によって物同士の直接的で経験的な類似とが、二つながらにして新たな知としての古典主義時代のエピステーメーを可能にするのだ。記号の一般的理論が物の分割と配分を可能にするとしても、そうした分割や配分の対象となるべき事物は記号の体系によっては与えられないのであり、そのためには自然発生的な想像力や自然の反復性が、記号の体系によって処理されるべき対象として存在することが必要なのである。記号の体系と類似の体系、これら二つの体系こそが古典主義時代の知のエピステーメーを支えているのである。

たしかにフーコーはデカルトに依拠しつつ物語と学問とを古典主義時代の知の構築という一つの事象の両面として考えていた。しかし既にみたように、デカルトは学問を正しい認識へといたることを目的であると同時に確固とした方法に基礎づけられるものとみなしたのにたいして、物語を学問より下の認識段階にあるものとして考えていたことを忘れてはならない。デカルトにとって物語と学問は不等の関係にあったのである。しかし、フーコーはデカルトとは異なり、物語と学問の両方を同じ知のエピステーメーの中に位置づけようとする。その意味においてフーコーの考察は、デカルトに依拠しつつもデカルト主義のパラフレーズに終始しない独自の考察を含んでいると考えることができるだろう。

III. 四辺形の輪郭——マテシス・タクシノミア・発生論——

学問を記号の体系として特徴づけ、物語に想像力による自然発生的な直接類似の運動を見るような視点はデカルトにはなくフーコー独自の考えである。しかしフーコーの独自性は、デカルトがしめした学問の垂直的な関係を水平化したというだけにとどまらない。この点を確認するために本節では、『言葉と物』の第三章第三節「記号の表象作用」⁶⁸⁾において主として『ポール＝ロワイヤル論理学』に依拠しつつフーコーが展開している、記号と記号の体系についての考察を確認する。特に、ルネサンス期の類似に代わって古典主義時代において知を体系化するという役割を担う記号に焦点を当てることで、経験的領域を区切る二面性の向こう側に、われわれはそれらの二面を結びつける別の二つの力を見いだすことになるだろう。

フーコーは『ポール＝ロワイヤル論理学』にしたがって、古典主義時代において有効な記号とは何かについて、シニフィアンとシニフィエの結合関係に関連する三つの可

変要素を用いて規定している⁶⁹⁾。まず第一に、結合関係の確実性は古典主義時代の記号が確実性か蓋然性かのどちらかの性質で、経験的領域を特徴づけることを明らかにする。ただしこの場合においても、この二つの性質は相反的なものではないのであり、「ちょうど継起関係のように、もっとも小さな蓋然性からもっとも大きな確実性へと展開していく関係」⁷⁰⁾をしめすこととなる。記号の結合が蓋然性から始まり最終的には確実性へといたるということは、蓋然性と確実性が混在しその割合が按配されているような状態があること、蓋然的でもあり確実的でもあるような共存状態の可能性を想定しうることをしめしているだろう。

また結合関係にもタイプがあり、記号が「要素としてそれが指示するものの一部をなすか、そのものから現実には切り離されているか」⁷¹⁾のどちらかの性質を持ちうるとされる。しかし実際には、記号と意味とは区別されはするものの不可分な関係にある。言い換えれば、シニフィアンとシニフィエは記号として同時に認識に与えられるとしても、認識がシニフィエをシニフィアンから分離して初めて記号は記号となる。そうであれば記号が成立するために分析は必要不可欠なものとなり、そこから記号の結合タイプの二面性、記号は分析の手段でもあり分析の結果でもあるという二面性が生まれるのである。

最後に結合関係の起源によって、記号は二つに分けられる。すなわち恣意的な記号と自然的な記号である。恣意的な記号とは、人為的記号としての言語体系であり、それは自然の事物の上に読み取ることができるものとしての自然的記号と対立する、と古代以来考えられてきた。ルネサンス期にもこの自然的記号と人為的記号の対立は存在していたが、ルネサンス期においては自然的記号は人為的記号をも包摂するとされ、自然的記号の方が人為的記号より記号の本質をよく表していると考えられてきた。しかし古典主義において人為的記号の方が自然的記号を基礎づける、とフーコーは指摘する：「自然的な物としての記号は、物から取り出された一要素以上の何ものでもなく、認識によって記号として成立せしめられた物にすぎない。反対に、[...] 人間の設けた記号は、もっとも十全な機能を持つ記号である」⁷²⁾。

以上のように、古典主義時代の記号の体系は、蓋然性と確実性、部分と全体、自然的なものゝ恣意的なものという三つの観点において二重化する。というのも、これらの観点からすれば、蓋然的でしかない記号や部分的でしかない記号は考えられないからである。換言すれば、記号は、自然的な記号だけから成立したり恣意的な記号だけから成立するものではなく、記号にはつねに自然的なものもあつかつ恣意的なものもあることになる。それゆゑ記号はその結合の起源においても二重化していることになるのである⁷³⁾。

以上のように、人為的記号の体系として、そして意味と不可分な記号としてありつつも意味を分析し分解して取り出しうるものとして、分析した結果を蓋然性から出発して順序立てることで確実性へと展開することを可能にするものとして、フーコーは記号の

体系を考えているのである。

そのようなものとしての記号の体系が古典主義時代のエピステーメーを特徴づけるとしても、フーコーの主張の力点がエピステーメーの二面性を強調することにあつたことをわれわれは忘れてはならないだろう。記号の体系ひとつだけではエピステーメーの二面性を強調することにはならない。とすれば、記号の体系に対峙する体系、自然発生的な想像力が行使される領域あるいは自然の類似性によって特徴づけられる空間が存在していなければならないのである。

フーコーは第三章第五節「類似性の想像力」⁷⁴⁾において記号体系と想像力の問題を取りあげ、われわれの疑問に答えるだろう。ヒュームの『人性論』(1739)に依拠しつつ、「認識にとって相似は欠くことのできぬ周縁」⁷⁵⁾である以上、相似関係が人間にとって免れがたい自然的諸関係となっていることをフーコーは認める。そのうえで、類似が「無言の消しがたい必然として認識のしたにいつまでもとどまる」⁷⁶⁾のだとフーコーは述べる。こうして古典主義時代における類似と記号との共存を示しつつも、フーコーはその共存様態がルネサンス期とは異なっていると述べる。ルネサンス期においては記号が類似を解読する手段として存在していた。ところが古典主義時代になると、記号は記号だけで言説的認識のすべてを構成することができるようになった代わりに、類似によって基礎づけられることを要求するようになるのである。いいかえれば、「もはや認識に先立つ内容を顕在化することではなく、認識の諸形態に適用の場を提供しうるような内容を提示することが問題」⁷⁷⁾となるのであり、古典主義時代の類似は記号という形式に内容を提供する役割を果たすようになるのである。

古典主義時代の認識は、類似の代わりに記号をその基盤としており、「相似であるかもしれぬものと比較され、要素(他の表象と共通な要素)に分析され、部分的同一性を呈示しうる他の表象と組みあわせられ、最後に秩序ある表のかたち配分される」⁷⁸⁾ようなものとして描かれることとなる。類似が形式としての記号にたいして果たす役割は、認識において内容が形式に対して与えられる際の条件であり限界であつて、そうした類似の役割は想像力によってのみ可能となる。このことは、反対に、想像力が類似によってのみその力を発揮することを意味する。だからこそ想像力は、「すくなくとも、一方は現在のものであり他方はおそらく久しい以前に実在することをやめた二つの印象を、ほぼ似かよつたものとして(隣接的で同時的なものとして、ほとんどおなじ仕方で実在するものとして)出現させる」⁷⁹⁾ことができるのだ。記号はその成立において類似による支えを必要条件として要求しているし、記号による表象は想像力が到達することができない限界を超えて成立することはできないのである。

このようにして描かれるのが、古典主義時代における想像力に関わる分析の二面性である。それは一方において、「継起する表象の系列を非顕在的だが同時的な比較の表に、いかにして換位しうるかを説明する分析」⁸⁰⁾をおこない、「表象の線状の時間を潜在的な要

素の同時的空間に変形する積極的（ポジティブな）能力として⁸¹⁾想像力を分析する。それは「印象、無意識的想起、想像力、記憶など、時間のなかにおける心像の力学ともいえる、あの無意識的基盤全体⁸²⁾を対象にそれらの無意識的なものを分析によって順序立てようとするポジティブな営みなのである。それとは反対に、「物の類似——秩序づけられ、同一の要素とあい異なる要素とに分解され、その無秩序な相似が表のかたち配分される以前に、物がもっていた類似——を説明する分析」⁸³⁾も存在している。それは「諸存在の表を混乱させ、それを漠然として遠い類似をもつ表象の列というかたちに散乱させる、そうした空隙や無秩序をとまなう《自然》の分析」⁸⁴⁾として、想像力によって生み出された結果としての無秩序な物の類似の起源を説明するような消極的（ネガティブ）な契機を構成する。こうして、想像力を用いた秩序の再構成をめざすポジティブな契機としての分析論 *analytique* が、自然の無秩序を前にしてそれを受け入れるネガティブな契機としての分析 *analyse* と対立することが明らかにされる。

しかし、ポジティブな契機としての分析論とネガティブな契機としての分析とは相容れぬものとして対立するものではない。むしろ両者は「発生論」という考えにおいて共通しているとフーコーは述べる。すなわち、認識の発生論において、想像力が順序を復元できるとしても、それと同時に想像力は物の同一性と相違性の直接の知覚を妨げているものと見なされるため、結果として想像力は「無秩序の契機、漠然たる類似の契機」⁸⁵⁾というネガティブな契機として考えられることになる。しかしその一方で、同じく認識の発生論において、混乱した事物の類似や自然の多様さが、想像力を用いて順序立てられるのだと考えるとき、そこに想像力のポジティブな契機を見いだすこともできるのだ。こうして、記号の体系を想像力がネガティブな契機とポジティブな契機という二つの契機によって裏から支えるという構図が明らかにされる。

以上のように、古典主義時代の知が記号の体系と類似の体系という二つの体系によって構築されていたことが明らかになる。それはデカルトの学問と物語の峻別から発展的に引き継がれた考えではあるが、両者の関係を垂直的に理解するのではなく、相互補完的にとらえる点に特徴があるといえよう。

ところで、デカルトに依拠しつつフーコーが物語と学問とが別々のものではなくひとつの事象の両面として、つまりは二面性として考えるにいたった根拠は何か。フーコーはそれを「古典主義時代の《エピステーメー》にとって基本的なものは […] 18世紀末まで恒常的で損なわれることなくつづく《マテシス》との関係」⁸⁶⁾に求めていた。《マテシス》との恒常的な関係があるからこそ、古典主義時代のエピステーメーは、必然的であると同時に恣意的であり、物語であると同時に学問であるというような同一性を保つことが可能になったのである。のちにライプニッツは、表象とは無関係なものとして「普遍数学」を想定し、それを思念の総合的な計算でありさまざまな真理の審級のひとつにすぎないものとみなして、直観を経由せずに確実な認識に至ることの可能性を見い

だすだろう。ここでフーコーが《マテシス》と呼ぶのも、デカルトが数学と区別して「普遍数学」と呼んだところのものである⁸⁷⁾。そして、『規則』のデカルトにフーコーが見いだした限りにおける《マテシス》とは、第七規則を引用した際に強調されていた「完全な列挙」と等価なものである。「完全な列挙」とは、順序の比較によって分析し順序づけるという認識行為が最終的に到達する完成された理想であり、だからこそ「あらゆる認識と《マテシス》との関係は、計量不能の物同士のあいだにさえ、秩序ある継起関係を設定する可能性としてあたえられる」⁸⁸⁾ことになる。

「完全な列挙」という理想は比較による分析という認識を通してのみ可能となる。この「完全な列挙」は順序による比較を計量による比較に従属させはしない。むしろ反対に順序の比較が計量的比較を包摂してしまうのであり、古典主義時代を通じて、分析は普遍的方法として価値づけられることになる。普遍的方法としての分析は、《マテシス》の名でフーコーが呼んでいる「完全な列挙」という理想の土台の上に、「語と諸存在と必要の領域における秩序の学」として、一般文法、博物学、富の分析という三つの経験的領域を「《記号の体系》」として出現させるのである⁸⁹⁾。

ところで、フーコーの理解するかぎりにおいて古典主義時代の《マテシス》は単純な自然を順序立てる場合に直接参照される方法であるが、複雑な表象を秩序づけねばならない場合には《マテシス》ではなく記号を媒介とする《タクシノミア》が参照される。《マテシス》が記号の体系を可能にする基盤として位置づけられていたのにたいして、《タクシノミア》すなわち分類学は、記号を用いて複雑で類似にあふれた自然を順序づけ、それに秩序をあたえる方法とされる。《タクシノミア》は「経験的表象が単純な自然に分析されうるはずだというそのかぎりにおいて」⁹⁰⁾はたしかに《マテシス》に含まれる。しかし、それとは反対に《マテシス》を参照する「明証性の知覚が表象一般のなかでの特殊な場合にすぎない」⁹¹⁾と考えるとき、《マテシス》は《タクシノミア》に含まれることになる。こうして《マテシス》と《タクシノミア》の表象における役割は相補的なものとなり、古典主義時代の知の構築にあたって両輪の役割を演じることとなるのである。《マテシス》が「相等性の学、したがって主辞＝属辞関係定立と判断の学であり、《真理》の学であるのにたいして、《タクシノミア》は、同一性と相違性をあつかうものであり、分節化と分類階級の学、《諸存在》に関する知」⁹²⁾となるのだ。

ここでわれわれは、デカルトの『規則』における議論を敷衍しながら、フーコーが記号を用いる一般的な理論と想像力を用いて経験的な類似をあつかう二つの側面を古典主義時代の知の構築に認めていたことを思い出さなければならないだろう。記号の体系を可能にする基盤としての《マテシス》を位置づけることは、《マテシス》をデカルトに依拠して見いだされた記号の体系に重ねることを意味するに違いない。とすれば、《タクシノミア》は想像力による経験的な類似の体系に関わっていることになる。事実《タクシノミア》は、何よりもまず「物のある種の連続体（存在の非＝不連続性または充満）

と、存在しないものを出現させながら、まさにそのことによって連続体をあかろみに出すことを可能にする、想像力のある種の能力とを前提にしている」⁹³⁾のだ。想像力によって、連続性が必ずしも認められない事物をひとつの連続体にまとめることこそが、《タクシノミア》が知の構築に果たす役割なのである。しかしそれは、ルネサンス期の類似による知の構築とは異なり、《マテシス》によって形成された記号を用いることによって初めて可能となるのである。だからこそ、《タクシノミア》において、「これらの記号は、特徴としての価値をもつもの、すなわち、表象の総体を、明瞭に区別され、指定しうる特質によってたがいに分離された、いくつかの領界に分節化する」⁹⁴⁾のである。このようにしてフーコーは、デカルトから導き出した記号の体系と類似の体系を《マテシス》と《タクシノミア》へと転換しているのである。

しかし、これだけでは二項の対立が示されているだけであり、四辺形はその輪郭すらあらわしていない。実のところ《マテシス》と《タクシノミア》が四辺形を形成するようになるためには、両者と《発生論》の関係を確認しなければならないのである：「《マテシス》、《タクシノミア》、《発生論》という三つの概念が、別々の領域というよりも、古典主義時代における知の一般的布置を規定する緊密な相互依存の網目を指示することがいまや理解されるだろう」⁹⁵⁾。三つの概念で四辺からなる形を作ることができるのはわけがある。というのも、フーコーは《発生論》の契機を《マテシス》と《タクシノミア》の両方に認めているからである。

古典主義時代における知の構築には、《タクシノミア》という諸存在を対象とした経験的分析が必要不可欠だったことを指摘した後で、フーコーは「計算可能な秩序の学としての《マテシス》と、経験的なものの列から出発していかんして秩序が成立するかを分析する《発生論》とが、古典主義時代の《エピステーメー》の両端に位置する」⁹⁶⁾と述べている。すなわち、《マテシス》との関係における《発生論》は、単一的な「秩序」を志向する《マテシス》とは別に、一連の経験性を対象にした分析を通じて、複数の「秩序」の成立起源を説明することを志向するのである。約言すれば、同一性をめざす《マテシス》と相違性を確認する《発生論》とが記号の体系のなかに共存しているのである。

同じ共存関係は、《タクシノミア》と《発生論》とのあいだにも確認されるだろう：「同様に発生論は、《タクシノミア》の内部に宿り、あるいはすくなくともそこに本源的可能性を見いだす」⁹⁷⁾。しかしながらここにおいて《発生論》は、《マテシス》において果たした役割と正反対の役割を果たす。というのも、既にみたように、《タクシノミア》は相違性を確認する役割を知の構築に際して果たすのであり、《マテシス》における《発生論》の役割は既に果たされているといえるからである。《タクシノミア》との関係において《発生論》が志向するのは、それゆえ、同一性である。しかし、《マテシス》と同じ同一性を志向するわけではもちろんない。《マテシス》が志向する同一性が、「時間継起の問題をはなれて」⁹⁸⁾記号化を押しすすめたのにたいして、《タクシノミア》との関

係における《発生論》は、「時間継起の記述として、記号を時間の類比物のなかに配分する」⁹⁹⁾ことをめざすのである。このことは《発生論》が、時間継起の同一性すなわち同じ時間継起のなかに位置づけようという前提を、《タクシノミア》が考察の対象とする諸存在のあいだに見いだそうとすることを意味する。

一方に、非＝時間継起的に同一性を構築する《マテシス》と、そうした同一性の成立可能性を経験的領域にあって未だ秩序づけられていない諸存在の分析を通じて紡ぎ出そうとする《発生論》がある。もう一方には、時間継起という単一性のなかに諸存在を配置することを企てるもうひとつの《発生論》が、諸存在の複数性を確立する《タクシノミア》にともなわれているのだ。

われわれはここで、こうした《発生論》の二面性が、実のところ、古典主義時代の知の構築における想像力の役割の考察のなかで言及されていたことを思い出さねばならない。確かに、前述したように、古典主義時代の知のエピステーメを語る際に想像力が取り上げられるのは、記号の体系と対をなしている類似の体系を対象とした考察においてであった。とすれば、想像力の二つの契機は記号の体系とは直接関連づけられておらず、その限りにおいて記号の体系を含めた四辺形の構成とは無関係といえるかもしれない。しかし、「対立するこれら二つの契機（一方は、印象における自然の無秩序というネガティブな契機であり、他方は、これらの印象からの秩序の再構成というポジティブな契機である）は、『発生論』という観念のうちに統一を見いだす」¹⁰⁰⁾のであり、《発生論》自体がネガティブな契機とポジティブな契機という二面性をもつことをフーコーははっきりと認めているのである。

ところで、想像力の（《発生論》ではなく）ネガティブな契機とは、自然の無秩序にたいして想像力が発揮される場合であり、想像力は記号を用いて諸存在に秩序をもたらすことに成功したり失敗したりする¹⁰¹⁾。そこにおいて想像力は人間に備わる能力の一つとしてとらえられており、人間から自然への働きかけの可能性を保証している。あるいは説明を逆転させて、人間が発動する想像力にたいして自然の諸存在が受動的あるいは消極的にしか作用しない契機と考えることもできるだろう。いずれにせよ、フーコーはデカルト、マルブランシュ、スピノザらを列挙して、誤謬の場としての想像力という立場を代表させている¹⁰²⁾。一方でポジティブな契機は、自然の類似が経験に先だって存在しているのであって¹⁰³⁾、そうした類似性こそが人間に想像力を能力として身につけさせる源泉なのだと考える¹⁰⁴⁾。自然の諸存在は能動的・積極的に人間に働きかけ、人間に想像力を生み出させるのである。フーコーは、コンディヤック、ルソー、ヒュームらの創世 *Genèse* への関心を例としてあげている。

とすれば、《マテシス》に対する《発生論》は、経験的諸存在を分析し複数の「秩序」の成立起源を説明しようとするものとして、諸存在から人間への働きかけの契機をもたない点でネガティブな契機とみなすことができるだろう。そこにおいて諸存在の《発生

論》は「表象可能性」として《マテシス》に結びつけられるのである。反対に、《タクシノミア》に対する《発生論》では、時間継起に順序づけられた諸存在が自らの複数性を語り始めることを人間は期待するしかないのであり、その意味において想像力のポジティブな契機と結びつけることができるのである。諸存在の《発生論》はそれら諸存在の時間的な連続性という前提をポジティブに《タクシノミア》に提供するのだ。

こうして古典主義時代の四辺形を形作る四つの線分（交点ではなく）が素描される。それは、デカルトの物語と学問の対立を出発点に、それを《タクシノミア》と《マテシス》へと転換し、その上で《タクシノミア》と《マテシス》のおおのみに《発生論》という契機をポジティブあるいはネガティブに導入することによって実現される。フーコーが「古典主義時代の《エピステーメー》は、そのもっとも一般的な配置において、《マテシス》、《タクシノミア》、《発生論的分析》の分節的体系として定義できるだろう」¹⁰⁵⁾と述べていたとしても、そのことによって古典主義時代の四辺形がその説明的な価値を失うわけではない。むしろ四辺形は三つの分節体系によってのみ可能になるのである。

おわりに

本稿はフーコーの『言葉と物』のなかでしめされている古典主義時代の四辺形について焦点を絞り、四辺形モデルがルネサンスにおける円環モデルに修正を加えたものであること、その修正がデカルトの『規則』の読解とその応用に由来していること、そして四辺形が《マテシス》、《タクシノミア》の二つに加えて《発生論》にポジティブな契機とネガティブな契機を区別し、それらを《マテシス》と《タクシノミア》の成立条件として位置づけることによって四辺形として成立していることを確認した。

《マテシス》と《タクシノミア》の二重性、《発生論》内部のポジティブな契機とネガティブな契機という二重性、これらの二重性を組み合わせることによって四辺形が描かれていると言い換えても良いだろう。そしてこの四辺形という枠組みは、フーコーによって周到に準備され組み立てられて『言葉と物』の考察のなかに組み込まれているのである。

無論、本稿が展開した議論が、本来的にはより広く『言葉と物』という作品の全体のなかに位置づけておこなわれるべきであったことは認めざるを得ない。この四辺形が、『言葉と物』の第四章以降において、一般文法、博物学、富の分析という、古典主義時代における異なる経験的領域の説明において、参照系のような役割を果たしていることについては、改めて検証しなければならないだろう。また、フーコーが近代と呼ぶ時代についても、四辺形が参照系としての価値をもつか否かについて、詳細に検討することが今後の課題として残されていることは言を俟たない。

注

- 1) Michel Foucault, *Les Mots et les Choses. Une Archéologie des sciences humaines*, coll. « Bibliothèque des sciences humaines », Paris, Éditions Gallimard, 1966.
- 2) 周知の通り『狂気の歴史』は *Folie et Déraison. Histoire de la folie à l'âge classique* として Plon 社から 1961 年に刊行された後、*Histoire de la folie à l'âge classique* とタイトルを変更して 1964 年に U. G. E. の « 10/18 » 叢書に入ることになる。その後 1972 年からは Gallimard 社から出版される。
- 3) MC, p. 13 [21]: « [...] ; en ce récit, ce qui doit apparaître, ce sont, dans l'espace du savoir, les configurations qui ont donné lieu aux formes diverses de la connaissance empirique. Plutôt que d'une histoire au sens traditionnel du mot, il s'agit d'une "archéologie". ». 本稿においては日本語訳における頁数を [] で付すこととする。
- 4) MC, p. 13 [21]: « Or, cette enquête archéologique a montré deux grandes discontinuités dans l'épistémè de la culture occidentale : celle qui inaugure l'âge classique (vers le milieu du XVII^e siècle) et celle qui, au début du XIX^e marque le seuil de notre modernité. ».
- 5) MC, pp. 131–136 [142–147]: « Chapitre IV Parler; VII. Le Quadrilatère du langage ».
- 6) MC, pp. 32–40 [42–50]: « Chapitre II La Prose du monde; I. Les Quatre Similitudes ».
- 7) MC, p. 32 [42]: « Jusqu'à la fin du XVI^e siècle, la ressemblance a joué un rôle bâtisseur dans le savoir de la culture occidentale. ».
- 8) MC, p. 32 [42]: « La trame sémantique de la ressemblance au XVI^e siècle est fort riche : *Amicitia, Aequalitas (contractus, consensus, matrimonium, societas, pax et similia), Consonantia, Concertus, Continuum, Paritas, Proportio, Similitudo, Conjunctio, Copula*. ».
- 9) MC, p. 33 [42]: « Qu'il suffise pour l'instant d'indiquer les principales figures qui prescrivent leurs articulations au savoir de la ressemblance. Il y en a quatre qui sont, à coup sûr, essentielles. ».
- 10) MC, p. 33 [42]: « D'abord la *convenientia*. A vrai dire le voisinage des lieux se trouve, par ce mot, plus fortement désigné que la similitude. ».
- 11) MC, p. 33 [43]: « La *convenientia* est une ressemblance liée à l'espace dans la forme du "proche en proche". Elle est de l'ordre de la conjonction et de l'ajustement. ». « similitude » と « ressemblance » とはほぼ同義で用いられている。
- 12) MC, p. 34 [44]: « La seconde forme de similitude, c'est l'*aemulatio* : une sorte de convenance, mais qui serait affranchie de la loi du lieu, et jouerait, immobile, dans la distance. ».
- 13) MC, p. 35 [44]: « Paracelse compare ce redoublement fondamental du monde à l'image de deux jumeaux "qui se ressemblent parfaitement, sans qu'il soit possible à personne de dire lequel a apporté à l'autre sa similitude". » (cité de Paracelse, *Liber Paramirum*, traduit par Grillot de Givry, Paris, 1913, p. 3).
- 14) MC, p. 36 [46]: « Les anneaux de l'émulation ne forment pas une chaîne comme les éléments de la convenance : mais plutôt des cercles concentriques, réfléchis et rivaux. ».
- 15) MC, p. 37 [46]: « Cette réversibilité, comme cette polyvalence, donne à l'analogie un champ universel d'application. ».
- 16) MC, p. 36 [46]: « [Le] pouvoir [de l'*analogie*] est immense, car les similitudes qu'elle traite ne sont pas celles, visibles, massives, des choses elles-mêmes ; [...] ». ».
- 17) MC, p. 36 [46]: « Le rapport, par exemple, des astres au ciel où ils scintillent, on le retrouve aussi bien : de l'herbe à la terre, des vivants au globe qu'ils habitent, des minéraux et des diamants aux rochers où ils sont enfouis, des organes des sens au visage qu'ils animent, des taches de la peau au corps qu'elles marquent secrètement. ».
- 18) MC, p. 37 [47]: « Il existe cependant, dans cet espace sillonné en toutes les directions, un point privilégié :

- il est saturé d'analogies (chacune peut y trouver l'un de ses points d'appui) et, en passant par lui, les rapports s'inversent sans s'altérer. ».
- 19) MC, p. 37 [47] : « [...] ; mais tous ces rapports, il les fait basculer, et on les retrouve, similaires, dans l'analogie de l'animal humain avec la terre qu'il habite : sa chair est une glèbe, ses os des rochers, ses veines de grands fleuves ; sa vessie, c'est la mer, et ses sept membres principaux, les sept métaux qui se cachent au fond des mines. » (cf. Crollius, *Traité des signatures*, p. 88.)
- 20) MC, p. 37 [47].
- 21) MC, p. 38 [48] : « L'espace des analogies est au fond un espace de rayonnement. ».
- 22) MC, p. 38 [48] : « [...] ; [la sympathie] suscite le mouvement des choses dans le monde et provoque le rapprochement des plus distantes. Elle est principe de mobilité : [...] ».
- 23) MC, p. 38 [48] : « Bien plus, en attirant les choses les unes vers les autres par un mouvement extérieur et visible, elle suscite en secret un mouvement intérieur, — un déplacement des qualités qui prennent la relève les unes des autres : [...] ».
- 24) MC, pp. 38–39 [48] : « [...] ; le feu parce qu'il est chaud et léger s'élève dans l'air, vers lequel ses flammes inlassablement se dressent ; mais il perd sa propre sécheresse (qui l'apparentait à la terre) et acquiert ainsi une humidité (qui le lie à l'eau et l'air) ; il disparaît alors en légère vapeur, en fumée bleue, en nuage : [...] ».
- 25) MC, p. 39 [48] : « [...] , [la sympathie] a le dangereux pouvoir d'*assimiler*, de rendre les choses identiques les unes aux autres, de les mêler, de les faire disparaître en leur individualité, [...] ».
- 26) MC, p. 40 [50] : « Par ce jeu [de la sympathie et de l'antipathie], le monde demeure identique ; les ressemblances continuent à être ce qu'elles sont, et à se ressembler. ».
- 27) 日本語訳では「秩序」が与えられているが、原文に用いられた「ordre」ということばは、「順序」や「次元」などの意味でも用いられることばであり、日本語訳でも適宜異なる訳語が与えられている。ただ、古典主義時代の知の考察という文脈においては、後述するように、ポール＝ロワイヤルやコンディヤックらは「順序」の側面を強調しており、本論では「順序」の訳語を主として用いることとする。
- 28) MC, p. 70 [81] : « C'est là un phénomène général dans la culture du XVII^e siècle, — plus général que la fortune singulière du cartésianisme. ».
- 29) MC, p. 72 [83] : « Le classicisme le [=le signe] définit selon trois varibales. ».
- 30) MC, pp. 64–65 [76] : « Qu'il suffise donc pour l'instant d'accueillir ces discontinuités dans l'ordre empirique, à la fois évident et obscur, où elles se donnent. ».
- 31) René Descartes, « Règles pour la direction de l'esprit », *Œuvres philosophiques*, tome I (1618–1637), Paris, Éd. Garnier Frères, 1963. 以下『規則』と略す。フーコーは『言葉と物』においてこの版を参照している。
- 32) 『精神指導の規則』の生成過程については詳細な研究が残されている : cf. Jean-Paul Weber, *La Constitution du texte des Regulae*, Paris, Société d'Édition d'Enseignement Supérieur, 1964.
- 33) *Ibid.*
- 34) 大出晃, 「解説『精神指導の規則』」, 『デカルト著作集4』, 東京, 白水社, 1973, p. 429.
- 35) *Ibid.*
- 36) アルノーはデカルトの『省察』に対する「第四の反駁」の作者であり、『ポール＝ロワイヤル論理学』の第二版の刊行にあたって、『規則』におけるデカルトの考察を第一版に差し替えて組み入れている。
- 37) 1701年の出版にあたっては、『規則』のほかにも六つのテキストが収録されていた : « Ce traité et le suivant [=Inquisitio veritatis per lumen naturale] ont été écrits en latin par l'auteur, et traduits pour la première fois en français par M. [Louis] Cousin. ».

- Ils furent publiés en 1701 à Amsterdam. On y avait joint 1° une traduction latine du *Traité du monde et de la lumière*, 2° une traduction latine du *Traité de la mécanique*, avec les observations de Poisson, 3° *Poissonii elucidationes physicae in Cartesii musicam*; 4° *Primaе cogitationes circa generationem animalium et nonnulla de saporibus*; 5° *Excerpta ex M. SS. R. Descartes*. » (*Œuvres philosophiques de Descartes*, 1835, p. 56).
- 38) « Présentation » des *Règles pour la direction de l'esprit*, in René Descartes, *Œuvres philosophiques*, Éditions Garnier Frères, 1963, p. 70.
- 39) Jacques Brunschwig, « Avertissement du traducteur », *Œuvres philosophique*, pp. 72–76. ブランシュウィックと同様の理解は、ダヴィド・ラブアンによっても共有されている：« Comme on le voit, en effet, les indications données par la Règle IV sont remarquablement convergentes et s'opposent assez directement à l'interprétation de la *mathesis universalis* engagée à la fin du XIX^e siècle : à aucun moment, on n'y voit se dessiner quelque chose comme un programme, plus ou moins équivalent à la méthode, ou à la réforme des mathématiques. » (David Rabouin, *Mathesis Universalis. L'Idée de « mathématique universelle » d'Aristote à Descartes*, coll. « Épiméthée », Paris, Presses universitaires de France, 2009).
- 40) Jacques Brunschwig, *op. cit.*, pp. 75–76 : « L'un des résultats les plus frappants de notre travail a été sans doute de constater que tous les passages, ou presque, [...] portaient précisément, de près ou de loin, sur le problème des rapports entre l'imagination et l'entendement : [...] ».
- 41) David Rabouin, *op. cit.*, p. 267 : « [...], il nous semble que la description de la Règle IV s'accorde avec le contexte général dans lequel la *mathesis universalis* est supposée bien connue de tous et renvoie de manière privilégiée à un certain usage de ce qui est alors considéré comme le noyau opératoire de la mathématique : les rapports et proportions. ».
- 42) *Ibid.*, p. 251.
- 43) MC, p. 65 [76] : « “C'est une habitude fréquente”, dit Descartes aux premières lignes des *Regulae*, “lorsqu'on découvre quelques ressemblances entre deux choses que d'attribuer à l'une comme à l'autre, même sur les points où elles sont en réalité différentes, ce que l'on a reconnu vrai de l'une seulement des deux”. » (*Cf. Règle I*, AT, X, 359, p. 77).
- 44) MC, p. 66 [77] : « Par conséquent, si on met à part l'intuition d'une chose isolée, on peut dire que toute connaissance “s'obtient par la comparaison de deux ou plusieurs choses entre elles”. » (*Cf. Règle XIV*, AT, X, 440, p. 168).
- 45) MC, p. 66 [78] : « “Presque tout le travail de la raison humaine consiste sans doute à rendre cette opération possible.” » (*Règle XIV*, AT, X, 440, p. 168).
- 46) MC, pp. 66–67 [78] : « Il existe deux formes de comparaison, et il n'en existe que deux : la comparaison de la mesure et celle de l'ordre. On peut mesurer des grandeurs ou des multiplicités, c'est-à-dire des grandeurs continues ou discontinues ; mais, dans un cas comme dans l'autre, l'opération de mesure suppose qu'à la différence du compte qui va des éléments vers la totalité, on considère d'abord le tout, et qu'on le divise en parties. » (*Cf. Règle XIV*, AT, X, 451, p. 182).
- 47) MC, pp. 67–68 [79] : « [...] : la multiplicité des unités peut donc “se disposer selon un ordre tel que la difficulté, qui appartenait à la connaissance de la mesure, finisse par dépendre de la seule considération de l'ordre”. » (*Cf. Règle XIV*, AT, X, 451–452, p. 109).
- 48) MC, p. 67 [78] : « [...] : la comparaison par l'ordre est un acte simple qui permet de passer d'un terme à l'autre puis à un troisième, etc., par un mouvement “absolument ininterrompu”. » (*Cf. Règle VII*, AT, X, 388, p. 109).
- 49) フーコーは第六と第七の両方の規則をさす注を付しているが、引用部分は第七規則からの注である。第六規則に対してもページ数をつけて参照しているのは、「まったく *absolument*」が含む「*absolu*」という用語について、デカルトが第六規則で定義づけているからであろうか。
- 50) MC, p. 68 [79] : « [...] ; le caractère absolu qu'on reconnaît à ce qui est simple ne concerne pas l'être des

choses mais bien la manière dont elles peuvent être connues. ».

- 51) MC, p. 68 [79] : « Si bien qu'une chose peut être absolue sous un certain rapport et relative sous d'autres ; l'ordre peut être à la fois nécessaire et naturel (par rapport à la pensée) et arbitraire (par rapport aux choses), puisqu'une même chose selon la manière dont on la considère peut être placée en un point ou en un autre de l'ordre. ».
- 52) MC, p. 69 [80] : « L'énumération complète et la possibilité d'assigner en chaque point le passage nécessaire au suivant permet une connaissance absolument certaine des identités et des différences : "l'énumération seule peut nous permettre, quelle que soit la question à laquelle nous nous appliquons, de porter toujours sur elle un jugement vrai et certain". » (Cf. *Règle VII*, AT, X, 382, p. 103).
- 53) MC, p. 70 [81] : « Ceux-là et eux seuls constituent la science, et quand bien même nous aurions "lu tous les raisonnements de Platon et d'Aristote, ... ce ne sont point des sciences que nous aurions apprises, semble-t-il, mais de histoire". » (Cf. *Règle III*, AT, X, 367, p. 86).
- 54) *Règle II*, AT, X, 362, p. 80 [14] : « Tout science est une connaissance certaine et évidente ; [...]. ».
- 55) *Règle II*, AT, X, 365, p. 84 [17] : « De là se conclut avec évidence la raison pour laquelle l'arithmétique et la géométrie sont bien plus certaines que toutes les autres disciplines : [...]. ».
- 56) *Règle II*, AT, X, 364–365, pp. 82–83 [16] : « [...] de toutes les disciplines reconnues par les autres, l'arithmétique et la géométrie étaient les seules à être exemptes de tout vice de fausseté ou d'incertitude, il nous faut remarquer, pour apprécier plus soigneusement pourquoi il en est ainsi, que nous parvenons par une double voie à la connaissance des choses, à savoir, par l'expérience ou par la déduction. ».
- 57) *Règle II*, AT, X, 364–365, p. 83 [16] : « Il faut remarquer, en outre, [...], mais que la déduction, c'est-à-dire la pure et simple inférence d'une chose à partir d'une autre, peut sans doute être manquée si on ne la voit pas, mais ne peut jamais être mal faite par un entendement doué de raison, fût-ce au plus faible degré. ».
- 58) デカルトは第十二規則の命題を以下のように記している : « *En somme, il faut se servir de tous les secours que peuvent fournir l'entendement, l'imagination, les sens et la mémoire ; tant pour prendre une intuition distincte des propositions simples, que pour combiner selon les règles les choses qu'on cherche avec celles qu'on connaît, afin de les trouver ; comme aussi pour découvrir les choses qu'il faut ainsi rapporter les unes aux autres ; tout cela de manière à ne négliger aucune fraction des ressources humaines.* » (*Règle XII*, AT, X, 410, p. 134 [62]).
- 59) Jacques Brunschwig, « Notes du traducteur », *Règles pour la direction de l'esprit*, p. 83.
- 60) *Règle III*, AT, X, 367, p. 86 [19] : « [...] ; et nous ne deviendrons jamais philosophes, si nous avons lu tous les raisonnements de Platon et d'Aristote, et que nous sommes incapables de porter un jugement assuré sur les sujets qu'on nous propose ; dans ce cas, en effet, ce ne sont point des sciences que nous aurions apprises, semble-t-il, mais de l'histoire. ».
- 61) デカルトは二つの認識様態を「直観と帰納 (intuitus scilicet et inductio)」としているが、第三規則では直観と「演繹 (deductio)」が考察されている。Cf. *Règle III*, AT, X, 367, p. 86 [20].
- 62) *Règle III*, AT, X, 368, p. 87 [20] : « Par intuition j'entends, [...] mais une représentation qui est le fait de l'intelligence pure et attentive, représentation si facile et si distincte qu'il ne subsiste aucun doute sur ce que l'on y comprend ; [...]. ».
- 63) *Règle III*, AT, X, 368, p. 87 [20] : « [...] ; ou bien, ce qui revient au même, une représentation inaccessible au doute, représentation qui est le fait de l'intelligence pure et attentive, qui naît de la seule lumière de la raison, et qui, parce qu'elle est plus simple, est plus certaine encore que la déduction ; [...]. ».
- 64) *Règle III*, AT, X, 369, pp. 88–89 [21] : « [...] ; nous entendons par [déduction] tout ce qui se conclut nécessairement de certaines autres choses connues avec certitude. ».
- 65) *Règle III*, AT, X, 369, p. 89 [21] : « Il a fallu procéder ainsi, parce que la plupart des choses sont l'objet d'une

connaissance certaine, tout en n'étant pas par elle-mêmes évidentes ; il suffit qu'elles soient déduites à partir de principes vrais et déjà connus, par un mouvement continu et ininterrompu de la pensée, qui prend de chaque terme une intuition claire : [...]. ».

- 66) MC, p. 68 [79] : « Le semblable, après s'être analysé selon l'unité et les rapports d'égalité ou d'inégalité, s'analyse selon l'identité évidente et les différences : [...]. ».
- 67) MC, p. 72 [83].
- 68) MC, pp. 72–77 [83–88] : « Chapitre III Représenter; III. La Représentation du signe ».
- 69) MC, p. 72 [83] : « L'origine de la liaison : un signe peut être naturel (comme le reflet dans un miroire désigne ce qu'il reflète) ou de convention (comme un mot, pour un groupe d'hommes, peut signifier une idée). Le type de la liaison : un signe peut appartenir à l'ensemble qu'il désigne (comme la bonne mine qui fait partie de la santé qu'elle manifeste) ou en être séparé (comme les figures de l'Ancien Testament sont les signes lointains de l'Incarnation et du Rachat). La certitude de la liaison : un signe peut être si constant qu'on est sûr de sa fidélité (c'est ainsi que la respiration désigne la vie) ; mais il peut être simplement probable (comme la pâleur pour la grossesse). ».
- 70) MC, p. 74 [85] : « [...] : d'une impression à une autre le rapport sera de signe à signifié, c'est-à-dire un rapport qui, à la manière de celui de succession, se déploiera de la plus faible probabilité à la plus grande certitude. ».
- 71) MC, p. 74 [85] : « En cet espace, le signe peut avoir deux positions : ou bien il fait partie, à titre d'élément, de ce qu'il sert à désigner ; ou bien il en est réellement et actuellement séparé. ».
- 72) MC, pp. 75–76 [86–87] : « [...] : naturel, le signe n'est rien de plus qu'un élément prélevé sur les choses, et constitué comme signe pour la connaissance. [...] Au contraire lorsqu'on établit un signe de convention, on peut toujours (et il faut en effet) le choisir de telle sorte qu'il soit simple, facile à rappeler, applicable à un nombre indéfini d'éléments, susceptible de se diviser lui-même et de se composer ; le signe d'institution, c'est le signe dans la plénitude de son fonctionnement. ».
- 73) 記号あるいは表象の二重性はフーコーが『言葉と物』の中で一節をさいて考察している重要な問題であるため、稿を改めて考察する必要があるだろう。ここでは、本稿において記号の体系と類似の体系と呼んでいる二つの体系が、つねに両方とも作動することによって記号一般が可能になることを名づけて、フーコーは「表象の二重性」と呼んでいることだけを指摘するにとどめる。
- 74) MC, pp. 81–86 [92–97] : « Chapitre III Représenter; III. L'Imagination de la Ressemblance ».
- 75) MC, p. 82 [93] : « Et cependant pour la connaissance, la similitude est une indispensable bordure. ».
- 76) MC, p. 82 [93] : « A l'ourlet extérieur du savoir, la similitude, c'est cette forme à peine dessinée, ce rudiment de relation que la connaissance doit recouvrir dans toute sa largeur, mais qui, indéfiniment, demeure au-dessous d'elle, à la manière d'une nécessité muette et ineffaçable. ».
- 77) MC, p. 82 [93] : « Double renversement par conséquent : puisque c'est le signe et avec lui toute la connaissance discursive qui exigent un fond de similitude, et puisqu'il ne s'agit plus de manifester un contenu préalable à la connaissance, mais de donner un contenu qui puisse offrir un lieu d'application aux formes de la connaissance. ».
- 78) MC, pp. 82–83 [93–94] : « C'est par [la ressemblance] que la représentation peut être connue, c'est-à-dire comparée avec celles qui peuvent être similaires, analysée en éléments (en éléments qui lui sont communs avec d'autres représentations), combinée avec celles qui peuvent présenter des identités partielles et distribuée finalement en un tableau ordonné. ».
- 79) MC, p. 83 [94] : « Ce pouvoir de rappeler implique au moins la possibilité de faire apparaître comme quasi semblables (comme voisines et contemporaines, comme existant presque de la même façon) deux impressions dont l'une pourtant est présente alors que l'autre, depuis longtemps peut-être, a cessé d'exister. ».

- 80) MC, pp. 83–84 [94–95] : « D'un côté, on trouve l'analyse qui rend compte du renversement de la série des représentations en un tableau inactuel mais simultané de comparaisons : [...] ». »
- 81) MC, p. 84 [95] : « La première série de problèmes correspond en gros à *l'analytique de l'imagination*, comme pouvoir positif de transformer le temps linéaire de la représentation en espace simultané d'éléments virtuels ; [...] ». ここでフーコーが用いている「positif」ということばは、それに対立する「negatif」ということばと併せて『言葉と物』が描く古典主義時代の崩壊と近代の成立を理解する上で最も重要な概念であると考え、それについては改めて稿を起こしたい。
- 82) MC, p. 84 [94–95] : « [...] : analyse de l'impression, de la réminiscence, de l'imagination, de la mémoire, de tout ce fond involontaire qui est comme la mécanique de l'image dans le temps. »
- 83) MC, p. 84 [95] : « De l'autre, il y a l'analyse qui rend compte de la ressemblance des choses, — de leur ressemblance avant leur mise en ordre, leur décomposition en éléments identiques et différents, la répartition en tableau de leurs similitudes désordonnées : [...] ». »
- 84) MC, p. 84 [95] : « [...] la seconde correspond en gros à *l'analyse de la nature*, avec les lacunes, les désordres qui brouillent le tableau des êtres et l'éparpillent en une suite de représentations qui, vaguement, et de loin, se ressemblent. »
- 85) MC, p. 84 [95] : « Ou bien le moment négatif (celui de désordre, de la vague ressemblance) est mis au compte de l'imagination elle-même, qui exerce alors à elle seule une double fonction : [...] ». »
- 86) MC, p. 71 [82] : « Car le fondamental, pour l'*épistèmè* classique, ce n'est ni le succès ou l'échec du mécanisme, ni le droit ou l'impossibilité de mathématiser la nature, mais bien un rapport à la *mathesis* qui jusqu'à la fin du XVIII^e siècle demeure constant et inaltéré. »
- 87) デカルトが『規則』において数学と普遍数学とを区別していることを忘れてはならない。Cf. Descartes, *Règle IV*, AT, X, 374–379, pp. 94–99 [26–30].
- 88) MC, p. 71 [82] : « De sorte que le rapport de toute connaissance à la *mathesis* se donne comme la possibilité d'établir entre les choses, même non mesurables, une succession ordonnée. »
- 89) MC, p. 71 [82] : « [...] ; au contraire, en corrélation avec la recherche d'une *mathesis*, on voit apparaître un certain nombre de domaines empiriques qui jusqu'à présent n'avaient été ni formés ni définis. [...] S'ils relevaient bien de l'*Analyse* en général, leur instrument particulier n'était pas la *méthode algébrique* mais le *système des signes*. Ainsi sont apparues la grammaire générale, l'histoire naturelle, l'analyse des richesses, sciences de l'ordre dans le domaine des mots, des êtres et des besoins ; [...] ». »
- 90) MC, p. 86 [97] : « Mais dans la mesure où les représentations empiriques doivent pouvoir s'analyser en natures simples, on voit que la *taxinomia* se rapporte tout entière à la *mathesis* ; [...] ». »
- 91) MC, p. 86 [97] : « [...] ; en revanche, puisque la perception des évidences n'est qu'un cas particulier de la représentation en général, on peut dire aussi bien que la *mathesis* n'est qu'un cas particulier de la *taxinomia*. »
- 92) MC, p. 88 [99] : « Mais entendue au sens strict, la *mathesis* est science des égalités, donc des attributions et des jugements ; c'est la science de la vérité ; la *taxinomia*, elle, traite des identités et des différences ; c'est la science des articulations et des classes ; elle est le savoir des êtres. »
- 93) MC, p. 87 [97–98] : « La *taxinomia* implique en outre un certain continuum des choses (une non-discontinuité, une plénitude de l'être) et une certaine puissance de l'imagination qui fait apparaître ce qui n'est pas, mais permet, par là-même, de mettre au jour le continu. »
- 94) MC, p. 87 [98] : « En ce savoir, il s'agit d'affecter d'un signe tout ce que peut nous offrir notre représentation : perceptions, pensées, désirs ; ces signes doivent valoir comme caractères, c'est-à-dire articuler l'ensemble de la représentation en plages distinctes, séparées les unes des autres par des traits assignables ; [...] ». »
- 95) MC, p. 88 [99] : « On voit que ces trois notions — *mathesis*, *taxinomia*, *genèse* — ne désignent pas

- tellement des domaines séparés, qu'un réseau solide d'appartenances qui définit la configuration générale du savoir à l'époque classique. ».
- 96) MC, p. 87 [98] : « Aux deux extrémités de l'*épistémè* classique, on a donc une *mathesis* comme science de l'ordre calculable et une *genèse* comme analyse de la constitution des ordres à partir des suites empiriques. ».
- 97) MC, p. 88 [99] : « De même la *genèse* se loge à l'intérieur de la *taxinomia*, ou du moins trouve en elle sa possibilité première. ».
- 98) MC, pp. 87–88 [98] : « [les signes comme perceptions, pensées et désirs] autorisent ainsi [...], — donc le réseau qui, hors chronologie, manifeste leur parenté et restitue dans un espace permanent leurs relations d'ordre. ».
- 99) MC, p. 88 [99] : « [la *genèse*] répartit [les signes] dans un analogon du temps comme une chronologie. ».
- 100) MC, p. 84 [95] : « Or, ces deux moments opposés (l'un, négatif, du désordre de la nature dans les impressions, l'autre, positif, du pouvoir de reconstituer l'ordre à partir de ces impressions) trouvent leur unité dans l'idée d'une "genèse". ».
- 101) MC, p. 84 [95] : « [...] : si [l'imagination] peut, par le seul redoublement de la représentation, restituer l'ordre, c'est dans la mesure justement où elle empêcherait de percevoir directement, et dans leur vérité analytique, les identités et les différences des choses ».
- 102) MC, p. 84 [95] : « [L'imagination] est dans l'homme, à la couture de l'âme et du corps. C'est là que Descartes, Malebranche, Spinoza l'ont en effet analysée, à la fois comme lieu de l'erreur et pourvoir d'accéder à la vérité même mathématique ; [...]. ».
- 103) MC, p. 84 [95] : « Au contraire, le moment positif de l'imagination peut-être mis au compte de la ressemblance trouble, du murmure vague des similitudes. ».
- 104) MC, pp. 84–85 [95] : « Si bien que la représentation, toujours enchaînée à des contenus tout proches les uns des autres, se répète, se rappelle, se replie naturellement sur soi, fait renaître des impressions presque identiques et engendre l'imagination. ».
- 105) MC, p. 89 [99] : « En tout cas, l'*épistémè* classique peut se définir, en sa disposition la plus générale, par le système articulé d'une *mathesis*, d'une *taxinomia* et d'une *analyse génétique*. ».

参考文献

- MC : Michel Foucault, *Les Mots et les choses — Une Archéologie des sciences humaines* —, Gallimard, 1966. (ミシェル・フーコー, 『言葉と物—人文科学の考古学—』, 渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974年)
- Œuvres philosophiques de Descartes*, éditées par Adolphe Garnier, tome III, Paris, Librairie classique et élémentaire de L. Hachette, 1835.
- René Descartes, « Règles pour la direction de l'esprit », traduction et notes apportées par Jacques Brunschwig, in *Œuvres philosophiques*, tome I (1618–1637), textes établis, présentés et annotés par Ferdinand Alquié, Paris, Éd. Garnier Frères, 1963. (「精神指導の規則」『デカルト著作集4』, 大出晁・有働勤吉訳, 東京, 白水社, 1973, pp. 9–128.)
- Jacques Brunschwig, « Avertissements du traducteur », « Règles pour la direction de l'esprit », *Œuvres philosophiques*, tome I (1618–1637), Paris, Éd. Garnier Frères, 1963, pp. 72–76.
- David Rabouin, *Mathesis Universalis. L'Idée de « mathématique universelle » d'Aristote à Descartes*, coll. « Épiméthée », Paris, Presses universitaires de France, 2009.